

日英語のEAT表現

著者	皆島 博
雑誌名	福井大学教育地域科学部紀要 第I部 人文科学(外国語・外国文学編)
巻	63
ページ	63-80
発行年	2007-12-14
URL	http://hdl.handle.net/10098/1422

日英語のEAT表現

皆 島 博

(2007年8月27日受付)

0. はじめに

本論では、「食べる」という行為を描写する日本語と英語の語彙について、意味論的な観点から対照言語学的な考察を行う。「滋養のために食物を噛んで口から体内に取り入れる」という行為はおそらく人類共通の普遍的なものであると思われる。それと同時にこの種の行為を表す言語表現、すなわち「EAT表現」(EAT-expressions)¹⁾も、あらゆる言語において何らかの形で見出すことができると思われる。

まず、日本語の場合、例えば、「食事する」「飲食する」「飲み食いする」「腹をこしらえる」「食う」「食べる」「口にする」「食わせる・食わす」「食べさせる」「食らう」「食らわす・食らわせる」「上がる」「召し上がる」「聞こし召す」「頂く」「ちょうだいする」「はしを付ける」「食する」「はむ」「はしが進む」「平らげる」(cf. 『分類語彙表：増補改訂版』国立国語研究所資料集14)などEAT表現の数が実に多いことがわかる。次に、英語の場合も、eat, have, take, consume, gobble, scoff, wolf, munch, champ, devour, swallow, ingest, feed, fare, gulp, bolt, dine, dispatch, banquet, gormandize, crunch, chew, masticate, nibble, gnaw, mumble, bite, partake (cf. *Roget's Pocket Thesaurus*) など日本語と同様EAT表現の数が多。

日本語の母語話者としての直感に即して言えば、日本語の最も基本的なEAT表現は「食べる」「食う」といったところであろう。そして、これらの日本語の動詞に最も良く対応する英語の動詞は“eat”ということになる。このことの一つの目安として、英語の“eat”に対して、どのような日本語のEAT表現が対応しているか『新英和辞典』(研究社, 2002)に挙げてある英語の“eat”に対する日本語の訳語のうち主要なものを以下に抜粋する：

- (1) a. 食べる, 食う
- b. 食い尽くす, 消費する, <害虫などが>食い荒らす
- c. <人を>いらいらさせる, 苦しめる
- d. <劇・演技者などを>熱中して見る, …に喝采を浴びせる

e. <損失などを>甘受する, …の責任を取る

このように英語の動詞“eat”に対する日本語の訳語の数は非常に多いが、直感的には、やはり英和辞典の訳語の上位に挙げてある「食べる, 食う」という動詞が最もよく当てはまりそうに見える。したがって、本論では、対照分析上の便宜も考慮し、日本語のEAT表現として動詞「食う²⁾」「食べる」(場合によって「食らう³⁾」も含める)の2つを選定し、それらに対応する英語のEAT表現として動詞“eat⁴⁾”を選定し、意味分析の対象⁵⁾とすることにする。

なお、本論は次のような構成になっている。まず、第1節では、日本語と英語のEAT表現に共通すると思われる基本概念(=本義)を仮定する。次に、第2節では、日本語のEAT表現について、その基本的な意味・用法の記述を行いながらその意味拡張のプロセスと意味のネットワークの展開について分析する。そして、第3節では、英語のEAT表現について、その基本的な意味・用法の記述を行いながらその意味拡張のプロセスと意味のネットワークの展開について分析する。最後に、本論のまとめとして、第4節では、日英語のEAT表現における共通点と相違点について整理する。

1. 日英語のEAT表現の基本概念

本節では、日本語と英語のEAT表現の意味とその意味拡張について見ていく前に、日本語と英語のEAT表現に共通する基本概念(=本義)というものが、もしあるとすれば、それはいかなるものであるのか、ということをお明らかにしておきたい。

はじめに、日本語のEAT表現に含まれる動詞の中の「食う」に対するいくつかの国語辞典の定義を以下に示す：

- (2) a. 食べ物をかんで飲みこむ。(大辞林)
- b. 食物をかんで腹に入れる⁶⁾。(ハイブリッド新辞林)
- c. 食物を口に入れ、かんでのみこむ。(広辞苑)
- d. 食物を口に入れ、かんでのみこむ。たべる。(新選国語辞典)
- e. 生命をたもつため食物をかんでのみこむ。(新解国語辞典)
- f. 生命を維持するために、必要な食物をとる。(新明解国語辞典)
- g. 生命を維持するために、食物を食べる。特に、固形の食物をかんで飲み込む。(明鏡国語辞典)

次に、英語のEAT表現に含まれる動詞の中の“eat”に対するいくつかの英英辞典の定義を以下に示す：

- (3) a. to consume food (*American Heritage Dictionary*)
 b. to take in through the mouth as food (*Webster's Third New International Dictionary*)
 c. to put (food) into the mouth, chew it, and swallow it (*Cambridge Dictionary of American English*)
 d. to put (food) in the mouth, chew if necessary, and swallow (*Webster's New World Dictionary Third College Edition*)
 e. take into the mouth, chew and swallow (food) ; consume food, take a meal (*Pocket Oxford Dictionary of Current English*)
 f. to take into the mouth piecemeal, and masticate and swallow as food; to consume as food. Usually of solids only (*Oxford English Dictionary*)
 g. to take into the mouth and swallow for nourishment; chew and swallow (food) (*Random House Webster's Unabridged Dictionary*)

これらの定義を眺めてみると、日本語と英語とは系統関係や文法構造が異なる言語同士であるのにもかかわらず、語の中核となる概念（コンテキストには影響を受けないコアとなる語の意味のことで、これを「本義」と呼ぶことにする）は大部分が共通しているように思われる。上記の国語辞典と英英辞典の定義に含まれている最大公約数的な語句を拾って対照させてみると少なくとも以下の4点が共通して含まれている。

- (4) a. 食物 // food
 b. 口の中に（入れる） // into the mouth
 c. 噛む // chew
 d. 飲み込む // swallow

つまり、日本語の動詞「食う」と英語の動詞“eat”はコアの概念においては「食物を、口の中に入れて、噛んで、飲み込む」という一連の動作の概念を内包した動詞である、という点で共通しているように思われるのである。これを「コア・アプローチ⁷⁾」の考え方に則して定式化してみれば次のようになるであろう。

- (5) コア：「X EAT Y」の関係において、X [通常, 人間] がY [通常, 食物] を体内に入れる。

EATの特徴記述

- (i) 口の中に入れる

- (ii) 嘔む
- (iii) 飲み込む

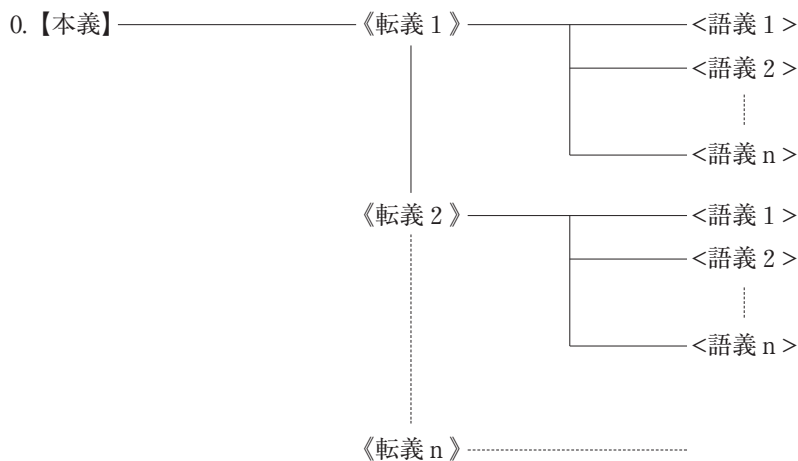
しかしながら、上記のEATの特徴記述に含まれる3項目は、日本語の動詞「食う」と英語の動詞“eat”における多義と意味拡張の基点ともいうべき本義を設定する上では詳細すぎると思われる。また、上で引用した国語辞典と英英辞典の定義には、偶然かもしれないが、動作主体としての「人間」の項目が含まれていない。以上のことから、日本語の動詞「食う」と英語の動詞“eat”には、コアとなる共通のプロトタイプ的な意味として、次のような本義を仮定することができるであろう。

(6) 「食う」と“eat”の本義⁸⁾：

【人間が食物を摂取すること】

なお、「本義」(【 … 】で囲んで記述する)には下位区分を設けることにする。本論では、「本義」から直接展開してきたいくつかの意味のことを「転義」(《 … 》で囲んで記述する)と呼ぶ。さらに「転義」から直接展開してきた個々の意味のことを「語義」(< … >で囲んで記述する)と呼ぶことにする。これらの【本義】から《転義》<語義>への意味拡張のプロセスのイメージを図式化すると次のようになる。

(7) 意味のネットワークの展開のイメージ図：



2. 日本語のEAT表現の意味拡張

2.0 日本語のEAT表現の本義

本節では、日本語のEAT表現「食う」「食べる」(「食らう」)の意味・用法を記述しながらその意味拡張のプロセスと意味のネットワークの展開について見ていく。

第1節で、「食う」「食べる」を含む日本語のEAT表現の基本概念(=本義)は【人間が食物を摂取すること】であると仮定した。この基本概念を基点として、意味拡張が展開し、様々な語義が派生していく。次の用例は、その典型的なもので、コア・アプローチの定式を用いて言えば、「X EAT Y」の関係において、X [人間] がY [食物] を体内に入れる行為を描写している。

- (8) 父は毎朝7時に朝食を {食う／食べる}
- (9) 姉ちゃんが俺のプリンを {食った／食べた}
- (10) 何か腹の足しになるものを {食いたい／食べたい}
- (11) 今晚うちで飯でも {食っていかないか／食べていかないか}
- (12) 菜食主義者は野菜は {食う／食べる} が肉は {食わない／食べない}

日上の用例に含まれている「人間が食べ物を取る」という行為は、「人間が生きていく」とことと密接な関係(近接性)があるので、【人間が食物を摂取すること】という本義はメトニミーによって《人間が生命活動を維持すること》という転義に意味拡張する。ここから次の用例に見られるような、<生きていく><生活する><暮らす><生計を立てる>などの語義が生じてきている。

- (13) {食う／食べる} に困らないだけの収入がある
- (14) 親の遺産だけで {食っていける／食べていける}
- (15) 私は文筆業／自営業で {食っている／食べている}
- (16) 小説家では {食っていけない／食べていけない}
- (17) こう物価高／安月給では {食っていけない／食べていけない}
- (18) 契約社員ってアルバイトと給料変わらないですよ。副業しなきゃ {食っていけない／食べていけないです}

2.1 《人間が何かの影響を受けること》

「食う」「食べる」は、上で「X EAT Y」のように定式化したように2項動詞(他動詞)であり、X項(主語)とY項(目的語)とがそれぞれどのような意味成分を担うかによって、意味に変化が生じてくる。X項が「人間」のままY項に「食物以外のもの」が入ると「食べる」という意味がなくなり《人間が何かの影響を受けること》という転義に意味拡張する。次の用例で「食う」は、主語のX項が目的語Y項によって「物理的な打撃を肉体に受ける」という意味を帯び

ている。

- (19) げんこつ／ビンタを {食う／*食べる／食らう}
- (20) 素浪人が背後から剣を {食った／*食べた／食らった}
- (21) 麻薬のディーラーが9発の銃弾を {食った／*食べた／食らった}
- (22) 現在のチャールズ皇太子が初めて学校の先生からお尻に鞭を {食った／*食べた／食らった} 時にはそれが新聞のニュースになるほどであった。

これらの用例は、特に〈好ましくないこと、ありがたくないこと〉を〈被る〉〈身に受ける〉というニュアンスが強い語義で用いられるが、注意すべき点はこのコンテキストでは「食べる」という動詞を用いることができないことである。そのかわりに「食らう」という動詞が「食う」とともにこのコンテキストではよく当てはまる。「食う」「食らう」に伴うぞんざいなニュアンスが「好ましくない」「ありがたくない」状況の描写というコンテキストと自然にマッチするのである。

主語のX項が目的語のY項によって「物理的な打撃を肉体に受ける」という意味は、主語のX項が目的語のY項によって「心理的な感情を経験」という意味にずれることがある。次の用例は、「物理的な打撃」ではないが、「好ましくないこと」「ありがたくないこと」を「心理的な打撃(影響)⁹⁾」として「受け入れる」という状況を描写しているといえる。

- (23) 小言／文句／大目玉を {食う／*食べる／食らう}
- (24) 総すかん／吊るし上げを {食う／*食べる／食らう}
- (25) もう二度とその手は {食わない／*食べない／?食らわない}
- (26) われわれはペテンを {食った／*食べた／?食らった} ような感じがしていた。

これらの用例に見られる「好ましくないこと」「ありがたくないこと」を〈被る〉〈身に受ける〉という「食う」「食らう」の語義は、さらに次の用例に見られるような、「X EAT Y」におけるX項が〈被害を受ける〉〈迷惑を被る〉〈不利な状況に陥る〉という語義へと意味拡張していく。

- (27) 傷害の罪で暴力団の若頭が懲役を {食う／*食べる／食らう}
- (28) いたずらに年を {食う／*食べる／?食らう} ばかりで恥ずかしい限りです。
- (29) 整理券がなくてコンサート会場から締め出しを {食った／*食べた／食らった}
- (30) 人身事故で電車が止まったため5万人が足止めを {食った／*食べた／食らった}
- (31) 立ち読みでコンビニに長居して店主に追い立てを {食った／*食べた／食らった}
- (32) センター試験の出来が悪くて東大の一次で足切りを {食った／*食べた／食らった}

次の用例でも、「食う」は基本的にはX項が<被害を受ける><迷惑を被る><不利な状況に陥る>という語義において用いられているが、特に、(下位の者・弱い者が上位の者・強い者を) <負かす><やっつける>、あるいは、(下位の者が上位の者の立場や地位を) <脅かす>というニュアンスが強い語義において用いられるように思われる。

- (33) 横綱朝青龍が幕下力士に稽古で負けを {食った/*食べた/食らった}
 (34) あの映画では主演の大スターが脇役の子役に {食われていた/*食べられていた/*食らわれていた}

ここまで見た用例は、《人間が何かの影響を受けること》という転義に収まるものであったが、次の用例では、X項がY項に何かの影響を及ぼしており、「人・相手の勢力・領分を侵す、他の領域に侵入する」という意味で「食う」が用いられている。したがって、これらの用例における「食う」については、《人間が何かの影響を与えること》を新たに意味拡張してできた転義として仮定しておくべきであろう。

- (35) 刺客候補が対立候補の地盤を {食った/*食べた/?食らった}
 (36) 関西の広域暴力団山口組が東京進出で稲川会の縄張りを {食った/*食べた/?食らった}

2.2 《生物が食物を摂取すること》

上で仮定した【人間が食物を摂取すること】という本義は、人間以外の生物についても意味拡張する¹⁰⁾。すなわちX項に「動物」(人間以外の生物)を表す名詞が入る場合は、《生物が食物を摂取すること》という別の転義を仮定しなければならない。

- (37) 小鳥が猫に {食われる/食べられる/*食られる}
 (38) ニワトリが餌を {食い始めた/食べ始めた/食らい始めた}
 (39) うちの犬はご飯も味噌汁も {食う/食べる/食らう}
 (40) 池の鯉がばら撒いたエサに {食いついた/*食べた/食らいついた}

2.3 《生物が被害を与えること》

次の用例は厳密に言えば、「生物」が「食物」として何かにかじりついている状況を描写しているのかもしれないが、生物の栄養分摂取のプロセスというよりもむしろ、「生物が口で何かに食らいつく」あるいは「噛み付く」という行為に焦点が当たっているように思われる。そしてこれらの行為によって、人間などに被害を及ぼしているのである。したがって、ここでは《生物が被害を与えること》という転義を仮定しておくのが妥当であろう。

- (41) 蚤が {食う／*食べる}
 (42) 蚊に {食われる／*食べられる}

したがって、これらの用例は、(虫が) <刺す><噛み付く>という語義において用いられているといえる。

また、次の用例も同様に《生物が何か被害を与えること》という転義から派生した(虫や動物が) <かじって穴をあける><歯を立てて噛む><噛んで傷をつける>という語義において用いられているといえる。

- (43) 虫の {食った／*食べた／?食らった} 本
 (44) サメが鋭い歯で人を {食う／食べる／食らう}

2.4 《無生物が何かを固定していること》

ここからは「食う」のX項に人間でも生物でもない無生物が入る場合にどのような意味の拡張が生じるかについて見ていく。次の用例では、X項に無生物が入り、同じく無生物のY項を「食う」状況を描写している。つまり、「人間が歯でものを噛む状況」との類似性から、メタファーによって「物が物を歯で噛んでいるような状況」への意味拡張が生じている。

- (45) よく毛を {食う／*食べる／*食らう} 毛抜き
 (46) 楔(くさび)が木にがっちり {食っている／*食べている／*食らっている}

したがって、ここでは、これらの用例については、口で啜えたり、あるいは歯でしっかり噛んでいるかのように《無生物が何かを固定していること》という転義を仮定しておくべきであろう。

2.5. 《無生物が何かを消費すること》

人間や生物は摂取した栄養分をエネルギーとして活動するが、この状況がメタファーによって無生物に拡張されると、次の用例のように、無生物が内部に蓄えたり、装着された具体物を動力源として働いている状況を描写する。

- (47) 燃費が悪い車はがばがばガソリンを {食う／*食べる}
 (48) 私の愛機(プリンター)はよくインクを {食う／*食べる} のです、これがまた。
 (49) 下のゲームも結構お金を {食う／*食べる} らしくコインはすぐになくなってしまふのだ。

- (50) 便利で安全な反面IH調理器具は電気を {食います／*食べます}

これらの用例は、燃料やお金など実体のあるもの、すなわち具体物を「無駄に使う」というニュアンスで用いられることが多い。つまり、《無生物が何かを消費すること》という転義への意味拡張が生じているのである。また、語義としては、<費やす><消費する><浪費する>といったものがあてはまる。

また、次の用例のように「時間」のように実体のないもの、すなわち抽象物について「食う」が用いられた場合でも、「無駄に使う」というニュアンスで「食う」は<費やす><消費する><浪費する>という語義で用いられる。

- (51) 手間ひまを {食う／*食べる} 雑用はやりたくない
 (52) 都市部の開票作業が大変時間を {食った／*食べた}
 (53) ラルンガルーカンゼまでは直通があったようですが、リタンまでのバスがどうしても日にちを {食う／*食べる} と思います。

2.6 《無生物が影響を受けること》

次の用例では、「食う」という動詞の主語のX項が目的語のY項を「食う」ことによって、X項が影響を受けているという状況を描写している。すなわち、この用例に対しては《無生物が影響を受けること》という転義への意味拡張が生じたと考えられる。

- (54) 試合が雨天順延になり20年ぶりのチームの優勝がお預けを {食った／*食べた／食らった}

しかし、上の用例とは逆に、次の用例では、主語のX項が目的語のY項に何かの影響を及ぼしている。

- (55) 大型ショッピングセンターが商店街の売り上げを {食ってしまった／*食べてしまった／*食らってしまった}

したがって、この用例に対しては、《無生物が影響を与えること》という別の転義への意味拡張が生じたと解釈するべきであろう。

3. 英語のEAT表現の意味拡張

3.0 英語のEAT表現の本義

本節では、英語の動詞“eat”の意味・用法を記述しながらその意味拡張のプロセスと意味のネットワークの展開について見ていく。

第1節で、英語のEAT表現の基本概念(=本義)は【人間が食物を摂取すること】であると仮定した。この基本概念を基点として、意味拡張が展開し、様々な語義が派生していく。次の用例は、動詞“eat”の最も基本的なものである。

- (56) We usually eat at six in the morning.
私たちは普通朝6時に食事をします
- (57) We should eat to live, not live to eat.
われわれは生きるために食べるのであって、食べるために生きるのではない
- (58) We're eating less rice now.
我々は以前ほど米を食べていない
- (59) He ate a hamburger for lunch.
彼はお昼にハンバーガーを食べました
- (60) What did you eat for breakfast?
朝食には何を食べましたか

上の用例は、動詞“eat”の最も典型的なものであり、既出のコア・アプローチの定式を用いて言えば、「X EAT Y」の関係において、主語のX項[人間]が目的語のY項[食物]を体内に取り入れる状況を描写しており、これらの用例における“eat”に対しては、<食べる><食う><食事する>という語義が最もよく当てはまると思われる。

3.1 《人間が何かを消費すること》

英語の動詞“eat”は、「人間が食べ物を食べる」という意味で用いるのが普通であるが、目的語のY項に「食物以外のもの」が入ると、次の用例のように、「無駄に何かを使う」というニュアンスとともに用いられる。

- (61) Kate's father has eaten into his fortune by gambling.
ケイトの父はギャンブルで自分の財産に手をつけてしまった
- (62) With your arrogance, you may have eaten away at your career.
君はその傲慢さで自分の経歴を台無しにしてしまうかもしれない

これらの用例に対しては、《人間が何かを消費すること》という転義を仮定することができるであろう。また、語義としては、「無駄に使う」というニュアンスを伴って、<費やす><消費する><なくす><失う>などが最もよく当てはまると思われる。

3.2 《人間が影響を受けること》

英語の動詞“eat”の本義【人間が食物を摂取すること】からのもう一つの転義は、人間が食べ物以外のものを（あたかも食べ物のように）「食べる」という類似（メタファー）に基づく方向へのものである。つまり、次の用例に見られるような《人間が影響を受けること》という転義への意味展開が見られる。

- (63) He ate up the stories of our journeys.
彼はわれわれの旅の話をつまみ食いした
- (64) He'll eat up whatever the broker tells him.
彼はブローカーの言うことなら何でも信じるだろう

これらの用例における“eat”には《人間が影響を受けること》から派生した、（人の話などを疑うことなく）<受け入れる><信じる><丸呑みする>などの語義が最もよく当てはまると思われる。

3.3 《生物が食物を摂取すること》

【人間が食物を摂取すること】という本義は、動作の主体が「人間」から人間以外の「生物」へ指示対象がずれ、次の用例のような《生物が食物を摂取すること》という転義へ意味拡張が生じる。

- (65) Lions eat meat.
ライオンは肉食だ
- (66) A cat which ate my canary
私のカナリアを食べてしまった猫
- (67) a plant that eats insects
昆虫を食う植物
- (68) a cell that eats bacteria
バクテリアを食う細胞

3.4 《生物が被害を与えること》

人間以外の生物, 特に, 害虫などの「口で何かに食らいつくこと, 噛みつくこと」を描写するのに“eat”が用いられるとき, 《生物が被害を与えること》という転義への意味拡張が生じる。

- (69) The peach was eaten hollow by Japanese beetles.
モモはマメコガネに食い荒らされて中空になっていた
- (70) The moths have eaten holes in my dress.
虫が私のドレスに穴を開けた
- (71) Locusts ate the country bare.
イナゴが土地を食い荒らして丸裸にした
- (72) The timber was so eaten by termites as to be useless.
材木は役に立たないほどシロアリに食い荒らされていた

これらの用例では, 害虫などの滋養分摂取のプロセスというよりもむしろ, 「噛み付く, 食らいつく」という行為に焦点が当たっているように思われるので, 語義としては<蝕む><食い荒らす><食って穴を開ける>などが最もよく当てはまると思われる。

3.5 《無生物が何かを消費すること》¹¹⁾

人間や生物は摂取した滋養分をエネルギーとして活動するが, この状況がメタファーによって無生物に拡張されると, 《無生物が何かを消費すること》という転義への意味拡張が生じる。

- (73) Sports cars eat up a lot of gasoline.
スポーツカーは燃費が悪い
- (74) A big old car like that eats gas.
あの種の古い大型車はガソリンを食う

これらの用例のように, 無生物が内部に蓄えたり, 装着された具体物を動力源として働いている状況を“eat”が描写するときは, 「無駄に使う」というニュアンスを伴って<費やす><使う><消費する>などの語義において用いられる。

また, お金や金銭について“eat”が用いられる場合も, 次の用例のように, 同じく「無駄に」というニュアンスを伴って<費やす><浪費する>という語義において用いられる。

- (75) A big car just eats up money.
大型車はとにかく金を食う (ガソリン代がかかる)

- (76) Health insurance costs are eating up his income.
健康保険の費用が彼の収入に食い込んでいる
- (77) The high cost of living in London is eating into my savings.
ロンドンの生活費は高いので私の貯金に食い込んでいる

最後に、時間や日数などについて“eat”が用いられる場合も、次の用例のように、「無駄に」というニュアンスを伴って<費やす><浪費する>という語義において用いられる。

- (78) Work alone ate 72 hours of my week.
仕事だけで私の一週間のうち72時間が費やされる

3.6 《無生物が影響を与えること》

動作の主体が人間以外の「無生物」である場合、「無生物が人間のように何か（食物）を食べる」イメージは「食べたものに対して何らかの影響を及ぼした」というイメージと結びつく。すなわち、《無生物が影響を与えること》という転義へと意味拡張が生じたということで、この転義は様々なコンテキストによって様々な語義を派生させる。これらの語義は、次の用例のように、特に、「何らかのダメージを与える」というニュアンスを伴って用いられることが多いように思われる。

- (79) Fire ate the forest away.
火事は森を焼き尽くした
- (80) The wood was eaten up by fire.
その森は火になめ尽くされた

これらの用例の場合、<灰にする><焼失させる>などの語義において用いられている。また、次の用例のように、“eat”の動作主体として酸などの化学物質、動作の対象として金属などが現れるときには、<腐食する><腐蝕する>などの語義において用いられる。

- (81) Acids eat into metal.
酸は金属を腐食する
- (82) Rust ate through the car fender.
車のフェンダーが錆びついた
- (83) Iron stairs eaten away by the sea breeze
潮風に腐食された鉄階段

次の用例では、川や海の水が土地を（人間が食物を食べるように）「食べている」というイメージが描写されている。この場合、“eat”は<浸食する><浸蝕する>などの語義において用いられているといえる。

- (84) The river is eating away at the bank.
川が土手のところを浸食している
- (85) For eons, the pounding waves ate away at the shorelines.
長い期間打ち寄せる波が海岸線を浸食した
- (86) Running water had gradually eaten into the rock, forming a channel.
流水が徐々に岩を浸食し水路を形成した

次の用例では、（人間が食物を食べるように）「他者の領分・領域・組織を侵す」というイメージが描写されている。この場合、“eat”は<蝕む><虫食む><損なう><荒らす>などの語義において用いられているといえる。

- (87) Time eats the strongest walls.
時が経つと最強の壁でも朽ちる
- (88) Dry rot had eaten into the chair legs.
乾燥腐敗が椅子の脚を蝕んだ
- (89) Meg's right breast was eaten away by cancer.
メグの右の乳房はガンにむしばまれていた
- (90) Urbanization eating up the rural farmlands
地方の農村を荒らし尽くす都市化の波

次の用例では、心配事など人の心の苦しみが「人間を食う」というイメージが描写されている。この場合、“eat”は<悩ませる><不安にする><心配させる><いらいらさせる>などの語義において用いられているといえる。

- (91) eating cares
心を蝕む心配事
- (92) What's eating you, Dad?
おとうさん、何をいらいらしているの
- (93) You've been very quiet—tell me what's eating you.
すごく無口なままですが、何を悩んでいるのか話して下さい

(94) The bitterness of having betrayed you ate into my soul.

君を裏切った辛さで心が押しつぶされた

最後に、次の用例では、病気や痛みなどの苦しみが「人間を食う」というイメージが描写されている。この場合、“eat”は<弱らせる><衰弱させる>などの語義において用いられているといえる。

(95) The pain has eaten the patient away.

苦痛で患者はすっかり参ってしまった

(96) She was eaten up by cancer. = Cancer ate up her.

彼女はがんのためにやつれ果てていた

4. おわりに

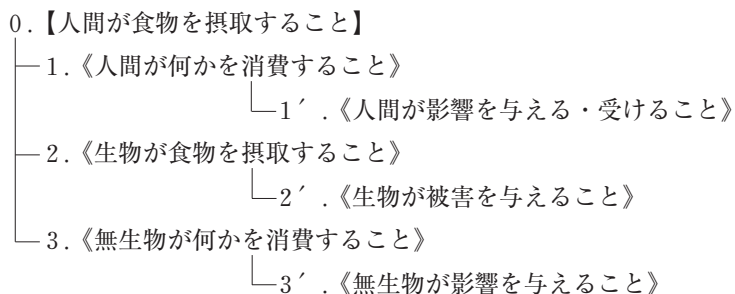
本論では、日本語と英語のEAT表現について、日本語の動詞「食う」「食べる」「食らう」と英語の動詞“eat”を対象に意味論的な観点から、対照言語学的な考察を行ってきた。ここまで観察してきた日本語と英語のEAT表現における「本義」から「転義」への意味拡張のプロセスを整理してそれぞれ図で示すと次のようになる。

図1. 日本語のEAT表現の意味拡張：

0. 【人間が食物を摂取すること】

- 1. 《人間が生命活動を維持すること》
 - └ 1'. 《人間が影響を与える・受けること》
- 2. 《生物が食物を摂取すること》
 - └ 2'. 《生物が被害を与えること》
- 3. 《無生物が何かを固定していること》
 - └ 3'. 《無生物が何かを消費すること》
 - └ 3''. 《無生物が影響を与える・受けること》

図2. 英語のEAT表現の意味拡張:



上の図が示すように、日本語と英語は共通の本義【人間が食物を摂取すること】から意味拡張を展開している。その方向は3系列に分かれ、日本語と英語とで大筋では共通している。すなわち、両言語ともに[X EAT Y]のX項の指示対象が「人間」⇒「生物」⇒「無生物」とずれていくのに応じて意味拡張も展開している点である。

日本語だけに見られた意味拡張は《人間が生命活動を維持すること》と《無生物が何かを固定していること》という転義への展開である。「食べる」行為のイメージが「生きる、生計を立てる」または「(口で挟んでいるかのように)何かを固定する」イメージと結びついているのは日本語だけである。一方、英語だけに見られた意味拡張は《人間が何かを消費すること》という転義への展開である。「食べる」行為のイメージが「人間が無駄に何かを使う」イメージと結びついているのは英語だけである。

【註】

- 1) EAT表現 (EAT-expressions) の用語はPardeshi *et al.* (2006) の命名による。
- 2) 現代日本語では、ぞんざいな印象を与える「食う」よりも「食べる」の方が一般的な動詞のように見えるが、歴史的には「食う」の方が「食べる」よりも一般的な動詞であった。「食べる」は本来「食う」、「飲む」の丁寧な言い方 (広辞苑) であり、「食う」は丁寧語の「食べる」に対して、一般的な言い方として使われてきたが、粗野な感じを伴うようになり、さりとて敬語化することもできないので、「食べる」に取って代わられる傾向にある (明鏡国語辞典)。
- 3) 日本語の最も基本的なEAT表現を「食う」「食べる」として選定したが、これらの比較において、「食らう」は「大飯食らい」「大酒を食らう」「くそ食らえ」「これでも食らえ」などの用例からもわかるように、特にぞんざいなニュアンスを伴って用いられることが多いように思われる。
- 4) 「食べる」という行為は直接的で下品イメージを伴うこともあるので、“eat”の遠回し語 (婉曲語) として“have”がよく用いられる (ジーニアス英和辞典, ウィズダム英和辞典, スーパー・アンカー英和辞典, 他)。これはちょうど現代日本語の「食う」(場合によっては「食らう」) 対「食べる」の関係を思わせるが、英語において「食べる」という行為を描写し、しかも特別な含意のない最も一般的な動詞は“eat” (Webster's Third New International Dictionary, 他) である。

- 5) 本論では、日英語のEAT表現にまつわる慣用表現（イディオム）については、原則として意味分析の対象からは除外した。便宜上の理由もあるが、“eat one’s words”（ことばを食う⇒前言を取り消す）vs. 「ことばを飲む、食言する」、 “eat alive”（生きたまま食う⇒人を利用する）vs. 「食い物にする」、 “eat at the same table”（同じ食卓で食う⇒同じ釜の飯を食う）vs. 「同じ釜の飯を食う」、 “be eaten up with…”（～によって食われる⇒～に心を奪われている）vs. 「食い入るように…する」、 “eat someone out of house and home”（家の誰かを食う⇒食いつぶす）vs. 「食いつぶす」などのように、少数の日英語の表現のペアに表現形式と意味・解釈において若干の相似性や類似性が見られるに過ぎないからである。
- 6) 『ハイブリッド新辞林』については「食べる」の見出しの定義を引用してある。
- 7) コア・アプローチによる意味の分析の手法については、田中・他（1987）を参照。
- 8) 英語の“eat”と日本語の「食う」「食べる」との大きな違いとして、“eat”はスープのような液体状の食物を摂取することに対しても使用される、という点が強調されることが多いが、OEDの定義“Now chiefly with reference to soup, or other similar food for which a spoon is used”が示すように「スプーンを使って摂取するスープ状の食物」にその使用対象がほぼ限定される。したがって、この点に関して、本論では“eat”と「食う」「食べる」の本義を別々に設定するほどの重大な概念上の違いではない、という立場を取る。
- 9) 「心理的な打撃（影響）」を表し、<馬鹿にする>という意味で用いられる「人を食った」という表現があるが、これはイディオムなので分析の対象からは外れる。
- 10) 匿名の査読者からEATという行為を「人間の行為」としてではなく「歯を持った動物の行為」としてとらえれば、これは意味拡張ではなくなる、との指摘をいただいたが、“eat”と「食べる」という動詞の行為の主体は何か、と問われれば、一義的にはやはり「動物」ではなく「人間」と答えるのが自然であろう。自然言語の語彙体系には必ずしも生物学上の（人間も動物の一種であるという）科学的な分類が反映しているわけではない。したがって、本論では【人間が食物を摂取すること】という本義から人間以外の生物について意味拡張が生じた、という立場を貫きたいと思う。
- 11) 瀬戸・他（2007:302）では、「<人・生物が><食べ物>食べる」という本義から直接展開した主意義の一つとして「<物・組織などを>食べて飲み込むように吸収する」という意義が提案されている。なお、「本義」「主意義」「意義」の定義の詳細については上掲書参照。

【参考文献】

- 国立国語研究所（2004）『分類語彙表：増補改訂版』（国立国語研究所資料集14）大日本図書。
- Pardeshi, Prashant *et al.* (2006) Toward a geotypology of EAT-expressions in languages of Asia: Visualizing areal patterns through WALs. *Journal of the Linguistic Society of Japan* 130: 89-108.
- 瀬戸賢一・編（2007）『英語多義ネットワーク辞典』小学館。
- 田中茂範・編（1987）『基本動詞の意味論：コアとプロトタイプ』三友社出版。

【参照辞書】

1. 国語辞典
 - 『大辞林』三省堂，2006.
 - 『ハイブリッド新辞林』三省堂，1998.
 - 『広辞苑』岩波書店，2000.
 - 『明鏡国語辞典』大修館書店，2003.
 - 『新解国語辞典』小学館，1982.
 - 『新明解国語辞典』三省堂，1997.

『新選国語辞典』小学館, 1978.

2. 英英辞典

American Heritage Dictionary, 1994.

American Heritage College Dictionary, 1993.

Cambridge Dictionary of American English, 2000.

Cambridge International Dictionary of English, 1995.

Collins Cobuild English Dictionary, 1995.

Longman Dictionary of Contemporary English, 1995.

Oxford Advanced Learner's Dictionary, 1989.

Oxford English Dictionary, 2002.

Pocket Oxford Dictionary of Current English, 1984.

Random House Webster's Unabridged Dictionary, 2001.

Roget's Pocket Thesaurus, 1946.

Webster's New World Dictionary Third College Edition, 1988.

Webster's Third New International Dictionary, 2000.

3. 英和辞典

『アドバンストフェイバリット英和辞典』東京書籍, 2002.

『ジーニアス英和辞典』大修館書店, 1996.

『グローバル英和辞典』三省堂, 1983.

『プロシード英和辞典』福武書店, 1991.

『プログレッシブ英和中辞典』小学館, 1980.

『リーダーズ英和辞典』研究社, 1999.

『新英和中辞典』研究社, 1983.

『ウィズダム英和辞典』三省堂, 2003.

4. 和英辞典

『スーパー・アンカー和英辞典』学習研究社, 2000.